No Nukes for Our Children's Future　People's Action Against TheGenkai Nuclear Power Plant　100 円

玄海プルサーマル裁判ニュース

No.39
発行日 2023.2.18

発行者: 玄海原発プルサーマル裁判を支える会 会長　澤山保太郎
編集者: 玄海原発プルサーマルと全基をみんなで止める裁判の会 代表 石丸初美
〒 840-0844 佐賀市伊勢町 2-14　TEL:090-6772-1137(石丸)
編集責任　永野浩二　080-5254-6866(江口)
E-mail：saiban.jimukyoku@gmail.com
ＵＲＬ：http://saga-genkai.jimdo.com/
Facebook：http://www.facebook.com/genkai.genpatsu
Twitter：@sagakarakaeru

11/9、2/8 福岡高裁 玄海控訴審 口頭弁論報告

「 誰かの介護を必要とする方の命は守られるのか？ 」
「 子どもが健やかに生きていけるための大人の責任を 」

11／9 入廷行動

2／8 裁判報告集会

2022年11月9日と23年2月8日、福岡高等裁判所(久留島群一裁判長)にて、玄海原発控訴審口頭弁論が開かれました。(11/9は全基差止第5回のみ。2/8は全基差止第6回と行政訴訟第5回)。それぞれ、約40人の仲間が傍聴に集まりました。

昨年7/20の法廷で、裁判長は被控訴人・九州電力に対して、控訴人の主張と噛み合った主張を出すよう求めましたが、九電が出した避難計画に関する準備書面2は噛み合ったものとは言い難い内容でした。次回以降、私達は反論を出す予定です。国は基準地震動に関する準備書面を出しました。

控訴人側からは、11/9には訪問介護ヘルパーである永野浩二・本会事務局長が意見陳述を行いました。介護現場の様子を紹介しながら原発避難が極めて困難であり「最後まで自宅で暮らしたい」という高齢者の人生最後の願いを原発事故は粉砕するものだと指摘し、即時停止を訴えました。

2/8には、会の発足以来の事務局メンバーである江口美知子・本会副事務局長が意見陳述。報告集会で、裁判運動を続けてこられた原動力は「怒り」だけでなく、「仲間」、「一緒に行動してきた人たちの言葉」だとして、「がんばらないけど、あきらめない」という仲間の言葉を紹介しました。「皆さんがいたからこれまでやってこられたんだなーって、再度思うことができて、すごく嬉しい。これからもよろしくお願いします」と述べました。

今回から裁判長が交代しました。裁判官は世論の動向を見ています。次回以降も傍聴・注目をよろしくお願いいたします。

5/31(水) 福岡高裁控訴審
傍聴お願いします！

13:00　集合
13:15　門前集会
14:30　行政訴訟 第6回口頭弁論
15:00　全基差止 第7回口頭弁論
15:15　記者会見・報告集会
@福岡県弁護士会館（裁判所隣）

◇今後　23/10/4(水)14:30～行政　15:00全基
24/1/17(水)14:30～行政　15:00全基

◀ CONTENTS ▶

■11/9, 2/8控訴審報告　・・・1
■意見陳述　永野浩二／江口美知子・・・2
■避難訓練報告　北川浩一／江口美知子・・・5
■原発推進策・運転期間延長NO！　荒川謙一・・・7
■12. 2反プルサーマルの日行動　・・・ 8
■原子力安全連絡協議会傍聴報告 石丸初美　・・・ 9
■原発のとなり村で生きる　中山作十郎・・・10
■南アルプス子どもの村中学校のみなさん・・・11

原発事故は人生最後の願いを打ち砕く ～ 訪問介護現場から

全基差止口頭弁論（11月9日）意見陳述　　永野浩二

佐賀市にある訪問介護事業所でヘルパー兼管理者をしている永野浩二と申します。

「住み慣れた地域、住み慣れた自宅で最後まで暮らしたい」という人生最後の願いを持つ高齢者や障がい者の日常生活のお手伝いをするのが私達の仕事です。利用者のみなさんの顔を思い浮かべながら、訪問介護の現場から思うことを述べます。

（1）

放射性物質は命を傷つける。だから、原発避難計画では、事故が起きたらできるだけ遠くへ避難する、避難が難しい場合は屋内退避するのが基本となっています。しかし、誰かの介護を必要とする方達は、速やかに安全に避難できるのでしょうか。避難先でそれまでと同じ支援を受けて生活を続けられるのでしょうか。

（2）

ある利用者の日々の生活を振り返ってみます。

一人暮らしの高齢者Aさん。病気や体のあちこちの痛みに耐えながら、何十年と住み慣れた自宅で最後まで暮らしたいと強く望んでいます。医師や看護師の定期訪問も受けながら、ヘルパーが1日2回、毎日交代で調理・食事介助、服薬管理、清拭、掃除・洗濯など生活に必要な様々な支援を行っています。ベッドから数メートル先にあるトイレには、痛みをこらえて立ち上がって、手すりや壁を伝って、なんとかたどり着きます。往復だけで30分かかることもあります。それでも、できることは自分の力に頼って動きたいのです。

身体が思うように動かなくなり、常時ベッド上で暮らすBさん。家族が仕事の合間にお世話をしながら、看護師、リハビリ士、ヘルパーがチームをつくって毎日支援に入っています。ヘルパーは、不安定な体温、血圧、酸素濃度を何度も測定して体調を確認し、ベッドの頭、背中、足の高さを動作ごとに微妙に調整して、食事介助、服薬介助、オムツ交換などを行っています。閑静な住宅街にあるきれいな自宅で、家族と毎日顔をあわせて暮らし続けたいのです。

（3）

スケッチ／T.H

もし原発事故が起きて避難となったら、Aさん、Bさんのような要介護者はどのような困難を強いられるでしょうか。

車への移動・乗降はスムーズにできるのか。放射能から逃れるため遠方への避難で道路は大渋滞、揺れる車中、長時間の移動に体は耐えられるのか。床ずれで褥瘡ができてしまわないか。避難先では、自分の体にフィットし、微調整のできるベッドがないと命にかかわる場合もあるのです。体調に合わせた調理や食事介助を誰がしてくれるのか。Aさんは以前、入院時に慣れない環境や食事で、食べ物が喉を通らなくなったこともありました。何種類もある薬を保持し、確実に服薬できるのか。馴染みのヘルパーは避難先に支援に来てくれるのか。ヘルパーにもそれぞれ、子どもや介護の必要な親、家族がいたりするのです。

屋内退避となったら、古い木造家屋で放射性物質を完全に遮断することはできるのか。飲料水や食料品などは、外は放射性物質が漂う中、誰が持ってきてくれるのか。

他にも、認知症を患い5分前のことを忘れてしまう方、視覚障がいのため見知らぬ場所への移動が非常に困難な方など、様々な利用者がいます。一人一人、必要な支援は違うし、日々体調は変化します。そういう人達が玄海周辺30キロ圏内外を問わず、自宅や施設にたくさんいます。東京電力福島原発事故では、避難途中や避難先の過酷な環境下で、多くの高齢者や障がい者が体調を崩したり、命を落としたり、置き去りにされたりしました。悲劇を繰り返してはなりません。

九州電力には、上記の疑問に答えるべく、支援

が必要な一人一人の命を守るための具体的な避難計画の説明をしてほしいと思います。数合わせの机上の避難計画の表面的な説明はいりません。

（4）

今日この場にいるみなさんの周りにも、介護や支援が必要な方がいるでしょう。献身的にお世話をされている方もいるでしょう。身近な方の顔を思い浮かべて、原発事故が起きたら…と想像してほしいと思います。

避難した後は自宅に戻れるのでしょうか。放射性物質がまき散らされた土地は、もう帰れない場所になっているかもしれません、終の棲家と決めた我が家が！

Aさんは、毎年お盆に出す盆提灯を今年も飾り、家族一同集まられました。私達が数日ぶりに支援に入ると、盆前よりも元気になっていました。聞けば、「お盆で帰ってきた主人が『お前、しっかりしろよ！』って言ったのよ」と頬を赤らめて言われました。我が家は、遠くに離れて暮らす家族も、天国にいる愛人も再び帰ってくる、再会の場所でもあります。「この家で最後までずっと過ごしたい」という、人生最後の願いを、原発事故は粉砕するのです。

人間の力ではどうしようもない自然災害と違って、原発事故は人の手で止められます。原発を動かさず、なくせばいいのです。どうか玄海原発を一刻も早く完全停止させてください。

子どもが健やかに生きていけるために大人の責任を

全基差止口頭弁論（2月8日）意見陳述　　江口美知子

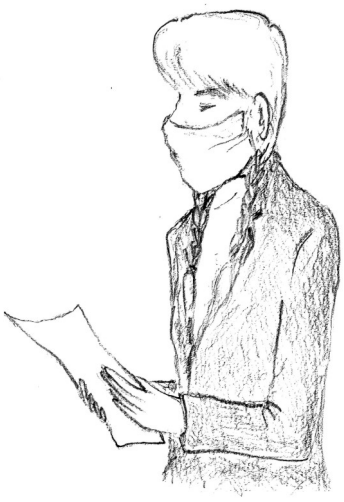
本日は陳述の機会をいただきありがとうございます。

私はこの裁判の会の立ち上げメンバーの一人で、原発のない世の中を目指しています。

2、30代の頃の私は海外への好奇心しかなく、社会の事など考えてもいませんでした。そんな私に一人の友人が原発問題を話してくれました。私は何も考えられず「事故が起こったら外国に逃げるからいい」と安易に答えました。「あなたみたいな人がいるから日本はだめになるのよ」と怒られました。その言葉は社会に目を向けるきっかけになりました。1986年チョルノービリ原発事故当時、私は初めての息子の母乳育児中でした。息子が被ばくしないか、とても不安でした。そんな経験からどこの原発が事故になっても、私たちの生活は原発から出る放射性物質で簡単に壊されてしまう、と知りました。その後、生協運動、図書館運動、不登校の居場所の運営などに関わり、子どもが健やかに生きていける為の大人の責任を意識するようになったのだと思います。

そして2011年3月11日の福島原発事故が起こってしまいました。

取り返しのつかない災禍を起こす原発は、私たちの生きている間に廃炉にし、跡形もなく片付ける事は出来ない事が分かっています。せめて原発運転停止、廃炉に続く道を作っておかなければ子ども達に申し訳が立たない気持ちで活動を続けています。



スケッチ／T.H

2021年水戸地裁は避難計画の実行性がないとして原子力発電所の運転を認めない判決を下しました。2022年12月1日福井県原発7基差止訴訟で、米原市長平尾道雄氏は「避難計画の策定は困難」「避難計画の実行性は、住民を被ばくさせないで避難させることだ」と、住民の命、健康を護る事を考えての証言がありました。

片や、佐賀県民を護るはずの山口祥義佐賀県知事は原子力災害避難計画の「県としての最悪のシミュレーション」についてどう考えるかの私たちの質問に、「具体的な想定はありません」と回答

しました。最悪の想定もしないままに、原発の稼働を容認しているのです。佐賀県発行の「原子力防災のてびき」では原発30キロ圏内（UPZ）の住民はまずは屋内退避せよ、とあります。屋内退避しても、放射性物質を完全に遮断できないと「てびき」にも書いてあるのにです。避難計画に実行性がなく被ばくありきで、まして具体的な避難計画が考えられないなら、少なくとも実行性のある本当に住民のための避難計画ができるまで原発は止めなければいけないと考えるのが安全優先の考えなのではないでしょうか。

原発の安全性を求める規制目標についても、福島事故時のセシウム137の放出量10000Tbqのたった100分の1の100Tbqが規制委員会審査基準目標値なのです。規制委員長は「審査はしますが、安全だとは絶対に申し上げません」とも公言しています。九州電力は「万が一の事故でも放射性物質の放出量は4.5Tbq/1基である」と説明しましたが、4.5Tbqは覚悟してくださいと言っているのです。その対策の一つが格納容器が損傷し放射性物質が外部に漏れたら「放水砲で打ち落とし」、海に流れ出た汚染水は「シルトフェンス（水中カーテン）」で拡散を防ぐというもので、規制委員会が許可した対策は、愚策としか思えません。

納得のできない原発運転に対して、私たち裁判の会は要請、抗議などをしてきました。不安が解消される回答はありません。

私たちは住み慣れた家から逃げたくありません。被ばくしたくありません。子どもたちに微量な被ばくもさせたくありません。この当たり前の望みは間違っていますか？

原発は止めることができます。法律の存在意義は、私たち国民の生命、身体、財産を護ることだと思います。司法は今の、また将来世代の生命、生活、人生にも想いを馳せ、子どもたちの目をしっかり見て、判決を出してください。よろしくお願いいたします。

お知らせ

提訴13周年 年次活動報告会

6月17日(土) 佐賀・アバンセ 4F第二研修室

11:00～年次報告会
13:00～講演会（予定）

2010年2月21日は裁判を決意し運動をスタートした日（決起集会）です。2月で14年目に入りました。長い年月の裁判闘争になりましたが、みんなで少しずつ力を合わせて、諦めないでいこうね、と声かけながらやってきたことの結果にほかなりません。そして、裁判傍聴したくてもできない支援者の方々が全国に大勢おられます。みなさんのお陰で今日まで裁判運動を続けてくることができました。

横断幕の「命の事だから諦める訳にはいきません」「犠牲の上にしか成り立たない原発はいらない」の言葉は私たちの運動の大事な基です。同じ思いのみなさんと、年次報告会にてお会いできることを楽しみにしています。

2/8　福岡高裁入廷行動

2/8　裁判報告集会

10月13日以降の主な活動経過

■2022年10月
13日　『玄海プルサーマル裁判ニュース第38号』発行
21日　「南アルプス子どもの村中学校」修学旅行
　　玄海原発視察の勉強会（講師）
22日　長崎大学ゼミ　玄海フィールドワーク（講師）
28日　今を生きる会総会
29日　佐賀県原子力防災避難訓練監視行動
■11月
5日　そいぎミーティング
9日　福岡高裁控訴審　全基第5回口頭弁論
30日　佐賀県知事候補へ公開質問（脱原発ネットワーク）
■12月
2日　反プルサーマルの日 玄海町長要請・ポスティング
10日　そいぎミーティング
25日　反プルサーマルの日　佐賀県知事要請
■2023年1月
14日　そいぎミーティング
■2月
1日　佐賀県原子力環境安全連絡協議会傍聴
4日　そいぎミーティング
8日　福岡高裁控訴審口頭弁論　全基第6回・行政第5回

2022年度 原子力防災訓練監視行動報告

住民避難訓練に参加して　　玄海原発反対！からつ事務所　北川浩一

唐津市UPZ住民の一人として避難訓練に参加したので体験を報告いたします。

●訓練日時　10月29日（土）10時半～15時
●訓練想定　感染症流行の中、県内で発生した地震（午前7時震度6弱）により、原子力事故が進展し全面緊急事態に。バスで避難所へ向かう。
●対象　自家用車避難が困難な唐津市UPZ住民31人（60～70代男女）
●集合場所　唐津市内中学校校庭
●車輌　大型バス3台
●支援者　1台に4名（一般職2名、保健師1名、防災士1名）、パトカーの先導
●行程　10:30出発
10:45　安定ヨウ素剤配布（バス内）
　　トイレ休憩（道の駅）
12:30　避難退域時検査（バス3台で2名予定）
13:00　避難所（佐賀市小学校）にて原子力講話

●集合場所 支援者　私服、使い捨てガウン着用の市職員混在（タイベックスーツなし）
パトカー乗員通常服
問題点　被ばく下の屋外待機、現状報告なし、簡易測定器なし。バス到着までのマニュアルなし（バス内で検温・個人情報の記入）

●バス車内 シート前後をアクリル板で簡易遮断、外気導入モード、検温
問題点　外気導入不可、簡易トイレなし、オムツなし、ペット用ケージなし。飲料水なし、放射能簡易測定器なし、AEDなし、ベッドスペースなし。　救急薬なし。状況報告（事故進展度、外気放射能濃度、風向き、避難先情報等）なし。

●安定ヨウ素剤 保健師（看護師）による簡易説明と飴玉配布、服用説明。。
問題点　現物提示なし、服用放射能基準不明、服用時の飲料水なし。

●トイレ 予定の道の駅コロナ発生で使用不可（想定内）。さらに隣接施設に降車するも使用不可（想定外）、次の道の駅へ
問題点　降車時の注意（外気の安全性確認）なし、測定器要、車内簡易トイレ要

●放射能汚染検査

人:全　身（バス1台で代表1名、テント内）。車輌:（正面、側面、タイヤ側面）
問題点　代表1名不可（避難所汚染持ち込みの可能性）テント不可、着替え対策
車輌下部、タイヤ底面測定要

●除染 ウェットティッシュ払拭
人:4万cpm*超過部位をウェットティッシュで4回払拭
問題点　体の広範囲対策不明（私は手の甲に5万cpm被曝想定）、払拭の有効性、着替え場所と衣類要。汚染車両の管理と代替輸送対策。

●検査員
問題点　使い捨てガウン、スクリーンマスクで当人の汚染を防げるのか疑問

●検査結果 被曝量（除染前後）、バックグランド値
問題点　検査後証明書を求めたところ、「バスに戻る（避難所入所）ための証明です」と、不可。被曝証明は今後私に起こるかもしれない事への唯一の証明。福島の被ばく者が一番困ったことですと交付依頼するも拒否。他の職員「記録は保管する。請求があれば知ることができる」と回答。

最新の検査・除染マニュアル（2022.9.28）では証明も結果保存もしない。当然、甲状腺被爆*をチェックする意図もなくなったものと思われる。
*1.3万cpmが1歳児甲状腺等価線量100mSv相当

●講話 佐賀県放射線技師会副会長（佐賀医大教授）による講話
問題点　専門家による真摯な話を期待したのだが･･･。国の安心安全神話に準拠した内容。
講話後に100mSvの問題、内部被ばく、国の原発政策が根拠とするICRP、アンスクエアの科学的信ぴょう性について会話するも疑問を感じておられない様子。国の副読本に沿ったレベルの講話。

まとめ　前日に離島訓練視察を断念、急遽思い立ち押しかけ参加。バス内で被曝検査を希望して受けることができ得難い体験ができた。

結果は、安易な想定と対策しかおこなわれていない現実に驚く。毎年積み重ねて完全にしていく･･･言葉だけの無責任体制。主催者にも参加者にも明日起こるかもしれないという緊張感は感じられなかった。

行程中を通じて情報不足を痛感、自分の置かれている状況がつかめない不安に曝される状態になると思われた。

退避時検査にみられる目的、基準値、除染方法など以前より後退していると思われる。被ばく容認の避難計画であるならば、全員の被ばく測定と証明は最低限の住民の権利だと思う。このスクリーニング制度では避難所の放射能汚染（4万cpm）は避けられないと思われた。また4万cpm設定の科学的根拠を知りたい。

避難途中の病人の発生と対策、車内時間長期化時の対策なども考慮すべきだ。大病院の避難を想定するだけで暗然とする思いであった。

佐賀県原子力防災訓練見学記　　江口美知子

今回は、佐賀競馬佐賀場外発売所（佐賀市大和町）で行われた、唐津市（二タ子1丁目地区）からの避難住民等に対する避難退域時検査訓練（原子力災害医療対策訓練）」を見学した。

こんなずさんな訓練でいいのか、と思う問題点が多くあった。

・住民の待機テントは屋根のみで囲いはなく、隣で車の除染がされ、当日は特に風が強かったので除染した放射性物質が飛んで、彼らは不用意な被ばくをしていた状況だった。

・車の除染場はシートを敷いたのみで囲いは全くない。周りの住民も被ばく可能性があるであろうという状況。

・検査場周辺住民にはおろか、避難訓練の新聞記事が当日の佐賀新聞に掲載されていなかった事から県は住民への周知をするつもりがないと感じた。

・当日の放射線測定線量の基準値は40,000cpm。福島事故時は13,000cpmだったが、事故発生により緊急時という事で100,000cpmまで上げられた。現在はなぜか40000cpmだけどこの値には内部被ばくは含まれない。玄海の事故の時も何cpmにあげられるか、不安しかない。被ばく証明も発行してくれないという。

・区別されるべき車の入り口と出口が同じ場所に設置されていた。

会場は見渡せるくらいの広さの場所。放射線測定ゲートがバス用と自家用車用が用意されていて線量測定。運転手は乗車したまま何やら質問をされ（2-3分）、そのまま奥へ移動。ゲートでの線量が低い車は、住民の測定は行われず住民を乗せたまま駐車場で停止。線量が高いと確認された車体は再度測定機で線量測定、住民は会場真ん中あたりに設置された住民用テント（囲まれていない屋根のみ）で降ろされ線量測定等などを行っている様子。

車はそのまま大きく敷かれたシートの上に移動。自衛隊員がガイガーカウンターの様な機械2台でワイパー付近とタイヤの腹の部分を測り、タイヤの腹をウエットティッシュで一拭きするとダストボックスの中に捨てた。バケツの中の乾いた洗車ブラシは使われなかった。

訓練終了後、現場統括責任者という県医務課長に話が聞けた。

・車の屋根の上は測らない。「国がそう決めているから」。

・ガラスの部分を拭かなかったと指摘すると、「線量が多くなかったから」。

・ウエットティッシュで拭いてもタイヤの溝に残らないかと聞くと、「だから拭いた後には必ず線量がなくなるまで確認する」と回答。

・除染作業中、シートを敷いただけで、埃は飛んで拡散する。放射能を広げない意図が感じられないと聞くと、「シートに落ちた土等は厳重に管理する。シート自体も廃棄になるだろう」との事。気にする事が違うのでは？

・会場の簡易トイレの設置がみられなかった。「場外馬券場のトイレを使う事が出来るのでいい」との返事。着いたばかりの人と除染をした人が同時に使う事もあり得るのでは？想定が甘すぎると感じた。

原発推進策・運転期間延長にNO！

３．11福島原発事故から12年、原発事故を忘れたかのようなあり得ない原発回帰の政策が、今、進められている。

一昨年10月に閣議決定された第6次エネルギー基本計画の見直し案では、原子力について、産業界等が強く主張した「新増設・リプレース」を見送り、「可能な限り原発依存度を低減」という表現になった。それには、原発輸出の破綻（日立製作所の欧州撤退など）が背景にあって、原発廃止を望む世論を考慮したためと思われた。

名古屋地裁で続く老朽原発40年運転廃炉訴訟、高浜原発1・2号機差し止め行政訴訟の法廷では、そもそも原子力規制委員会の審査がまともに為されていない実態が浮かび上がっている。原発の心臓部、原子炉圧力容器は鋼鉄製なので、長年にわたる運転で中性子が照射され続け、次第に金属特有の粘り(延性)が失われ、固くなっていく。この脆さが進むと、地震など事故時に原子炉を水で緊急冷却すると脆くなった金属が耐え切れず亀裂、それが貫通して圧力容器が破壊されるという恐ろしい「脆性破壊」が起こる。こうした事態を避けるために、お釜と同じ材料の試験片を炉内で保管し、定期的に取り出し安全確認するという試験データ採取、この検証作業が必須である。しかし、名古屋地裁の裁判の知見をもって臨んだ市民による政府交渉（2022年11月７日）を通じて、規制側の大問題が明らかになった。

それは、①最新の研究では脆性破壊試験に使用される民間規格（JEAC）が低評価な為に改訂が要求されるも、規制委審査はそのままでも合格とし、②監視用試験片が不足してもレプリカ試験片評価などでも容認したこと、③審査基準となるデータ未確認（破壊試験の元データと加圧衝撃試験評価における熱伝導率の未確認）でも、事業者を信頼し合格としたこと。これでは審査の意味がなく、見逃し不正と見られても仕方がない。

玄海原発３・４号機でも同様だ。これまで私たちと九電の交渉でも「試験片が紛失した」とか破壊靭性試験の結果で脆性遷移温度に異状が生じても「研究室(ラボ)試験を継続実施する必要性はない」などと答え、その後に文書回答もされていない。

2022年12月８日、経済産業省・資源エネルギー庁の原子力小委員会は「今後の原子力政策の方向性と実現に向けた行動指針」をとりまとめた。この指針には、「次世代革新炉」の開発を表題とした原子力産業への公的リソースの投入、プルサーマルの推進、官民一体の海外プロジェクトへの参画支援などが盛り込まれている。小委員会のメンバーには、原子力産業の利益の為に代弁する委員が意図的に集められ、国民の意見など置き去りにしほとんど議論もせずに圧倒的多数決で決められている。指針には「立地地域との共生」が謳われ、新たな交付金拡充案として、老朽原発の稼働やプルサーマルの受け入れに対して、反対などが起きないように対策案が施されている。裏を返せば、地域振興の名の元にリスクの受け入れを地域に押し付ける手段である。

そして、12月20日より、内閣府等からの「GX実現に向けた基本方針」をはじめとして、資源エネルギー庁、原子力委員会、原子力規制委員会より合計4件の原発推進案に対するパブリックコメントが募集告示された。GX(グリーントランスフォーメーション)とは「緑の変革」と言う意味になるが、岸田政権が＜電力の需給ひっ迫＞＜ウクライナ情勢の影響とするエネルギー燃料価格の高騰＞＜エネルギー安全保障＞を理由に掲げ、さらに7基再稼働や老朽化原発の原則40年の廃止で規制側の原子炉等規制法を骨抜きにして、60年超えの運転も利用推進側で都合よく扱える「電気事業法」移行で法を改悪すること、さらに原発は気候変動対策に有効だからと次世代革新炉という原発の新増設やリプレースなどを一気に押し進めると言い出した策である。

これに対し、数千件に及ぶ反対や慎重な意見が寄せられた。そして、全国で始まった「説明・意見交換会」では、「しっかりと国民の声を訊け」「撤回」「見直し」との厳しい声が次々に上がっている。しかし、経産省は「意見は参考にはするが、反映するつもりはない」と言いつつ、2月10日完全に無視した形で「閣議決定」された。規制委での反対意見も無視し、全国意見交換会が終わることさえ待たないこの国は、本当に無法国家になってしまったのか？

3.11福島原発事故の12周年の日、『決して忘れてはならない福島と故郷を無くした人々を！二度と繰り返してならない過ちを！原発は絶対要らない！』と改めて強く宣言しなければならない。

（荒川謙一）

第13回12・2反プルサーマルの日
玄海町内チラシ戸別配布と要請行動

2009年12月2日は、日本初のプルサーマル運転が玄海3号機で始まった日です。私たちは、毎年この日「反プルサーマルの日」として活動を続けてきました。今年で13回目。活動内容は、玄海町内にチラシを戸別配布、同時に玄海町長・佐賀県知事・九州電力社長への要請行動です。

05年、3回のプルサーマル公開討論会が開催され古川康・元佐賀県知事は、議論は尽くされたとして「安全性の確保ははかられている」と発表。プルサーマル実施へ動き出しました。06年、県民投票条例制定を求める署名活動を実施し、約5万筆（有権者約70万人）の署名を県議会に提出。しかし、あっけなく否決。その後、“05年県主催の公開討論会”は「やらせ」であったことが発覚しました。

玄海3号機のプルサーマルは、安全性が十分検証されていないまま強行されました。エドウィン・S・ライマン博士は、日本のプルサーマル計画は、「地元住民や近隣地域の人々は政府や電力会社によって『モルモット』にされる」と厳しく批判。プルサーマルが安全余裕を切り縮めることは、九州電力も認めています。その上、玄海３号機は出力118 万kWと日本の加圧水型炉では最大級であり、MOX燃料内のプルトニウム含有率（富化度）は世界に例を見ないほど高く、これは危険な実験というべきであるとして、私たちは10年８月９日MOX燃料使用差止で提訴。私たちの4つの裁判闘争の始まりです(MOX裁判は16年6月27日控訴審不当判決)。

今回の参加者は19名。9時半玄海町集合。町長へ要請質問書を提出。例年だと要請書を当日提出、回答は後日郵送としてきましたが、今回「回答を直接聞いた上で質問もしたい」旨を担当者に交渉した結果、了承してもらいました。要請書は一ヶ月前に郵送し、当日、町担当職員が準備してきた回答を読み上げそれを受けて参加者から町長への要望や思いなどを伝えることができました。「今回のやり方はとてもよかった」と参加者から感想をもらいました。

玄海町からの回答で、「玄海町民の避難先・小城市は年間6割強が玄海町方面からの風となっているが、避難先として妥当か」との問いに、「小城市は当該区域外であるため、避難先として妥当と考えています。よって、第2の避難所を確保しておりません。なお、広域避難が必要となる大規模な原子力災害を含む複合災害時における避難施設については、県が、玄海町、関係周辺市、その他市町及びその他の防災関係機関等から収集した避難経路の状況や避難施設の安全又は原子力災害以外の災害に係わる指定避難所としての使用状況に基づき、玄海町及び関係周辺市に対し、代替となる避難経路や避難施設について示すものとされています。」（回答より抜粋）と、事故が起きてから県からの連絡待ちとしています。間に合わないのは明らかです。その他の問にも“国が…県が…”と、町独自の考えは全くなく、これで住民は守れるのかと疑問です。

面談後、10班（車）に分かれ各自地図とチラシ50部ずつ持って出発、675戸に配布。終了後公民館で報告兼意見交流会を行いました。知事と九電への要請書は県知事選中だったこともあり、12月25日提出しました。

福島原発事故からもうすぐ12年経とうとする今も、事故処理も廃炉の見通しも原発汚染水の処理も難航を極めています。岸田首相は、まるで福島原発事故はなかったかのように猛スピードで原発推進政策に大転換を公言しました。国民はモルモットですか？事故を起こした国がするべきは原発を止める事以外にありません。これからも自分たちにできる活動を続けていきます。

（石丸初美）

第95回佐賀県原子力環境安全連絡協議会（2023年2月1日）を傍聴して

表記協議会は1975年1月（同年10月 玄海1号運転開始）から始まり、原則、夏冬年2回開催されてきた。市民には情報が入りにくく、今回はたまたま開催前日に知る機会があって、急遽参加できた。一般傍聴者の発言はできない。主催は佐賀県。開催場所は玄海町町民会館。県、九電、玄海原子力規制事務所から説明の後、質疑応答がある。

九電は説明の中で「積極的な情報公開と丁寧な説明に努めて参ります」と繰り返していたが、同じ住民の私たちに対する対応は常に不誠実で不信感が募る。今回の協議会には、傍聴者がいる事で少しでも緊張感のある議論となればと思って傍聴した。以下、気になった点を報告したい。

【出席者】佐賀県知事（会長）、玄海町長（副会長）、県議会及び発電所周辺地域の首長、議長、漁業・農業団体の代表者、商工会、PTA会長、高校生代表2名など20名で構成。

資料と結果は佐賀県HPに掲載。（「第95回佐賀県原子力環境安全連絡協議会結果」で検索）

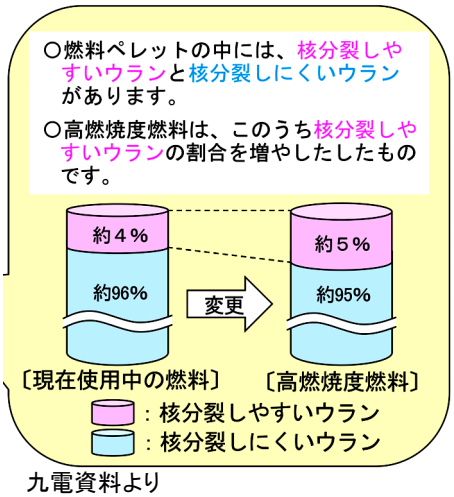
【説明内容の一部】

(1) 2022/12/5 3号機特定重大事故等対処施設完成→2023/1/10通常運転開始

(2) 2022/12/28 佐賀県、玄海町へ「事前了解願い」提出 ①4号機高燃焼度燃料導入 ②1・2号機廃止措置計画変更

(3) 2022/12/28 規制委へ原子炉設置変更許可申請「4号機高燃焼度燃料導入」

使用済み燃料は六ヶ所再処理工場に搬出する事が基本。搬出するまでの間、リラッキングや発電所敷地内の乾式貯蔵施設建設で対処するが、使用済燃料発生量低減等の観点から4号機で2024年度を目途に**高燃焼度燃料導入**。



九電資料より

既に国内（加圧水型原子炉）で3000体以上の使用実績がある。使用済み燃料プールの冷却も現行の冷却設備で十分可能。

現在使用中の燃料：約3サイクルで使用済となる。
高燃焼度燃料：約4サイクルで使用済となる。

住民の命の安全に関わる重大な変更であり、事前了解願いを出された知事、町長は議会や市民が納得する説明が必要である。

【参加者からの質問】（吹き出しは筆者コメント）

(1) 乾式貯蔵施設について⇒貯蔵容量は乾式貯蔵容器40基（燃料集合体で960体分）、通常運転では8年分。仮に六ヶ所再処理工場が動かなくても、リラッキングと合わせて16年分は確保できる。

この回答に再質問は出なかった。六ケ所が動かなかったら、どうするのか？ その説明はない。

(2) 高浜4号機の原子炉自動停止事故について

参加者「一番心配なのは、この事故を機会に国がまた全部の原発を停止して調査をやり直せというのが怖い。熟慮して判断してもらいたい」

規制事務所「今原因究明の最中でわからない」

住民として心配すべきは、同様のトラブルが玄海でも起きるのではないかということだ。

(3) 資料について

参加者「資料の中で『玄海原発に起因すると考えられる放射線の異常は認められない』が繰り返し出てきている。『何もないよ、々、々』とあまり強く言われると不安という意見もある。疑いを持たれないような資料作りをお願いしたい」

佐賀県「そうであれば、次回から解りやすくまとめ方を工夫していく」

必要なのは、原発稼働にとってマイナスとなるデータや専門家の意見なども含めて、すべて公開すること。本当の危険を覆い隠して、オブラートに包んだ言葉での説明はやめるべきだ。30キロ圏自治体は避難計画作成を強いられているが、なぜ避難しなければならないのか、その危険性をあまりにも知らされていない。団体代表だけでなく、すべての住民に対して同様の説明会を開くべきだ。

（石丸初美）

原発のとなり村で生きる

中山作十郎（唐津市肥前町）

2023年1月24日現在、入院中。胃と肝臓の末期がんで、余命いくばくもない。両親を末期がんで亡くした。5歳年下の弟は福岡の会社に勤めている。

佐賀県の西北端に位置する我が村は、三方を海に囲まれた半島の台地で、先人が開いた農地を耕し、細々と暮らしてきた。村では中堅クラスの農家だったが、今、くわや鎌はさび付いている。

中学を卒業する年、コメの減反政策が始まり、2年後はみかんが暴落。高校を卒業して就農する年、原発が稼働を始めた。それでも十数年は、農業を何とか続けた。主力のコメの生産者価格が下がり、他の産品も低くなり、営農に見切りをつける仲間が相次いだ。　多くが出稼ぎで生計を補ってきた。俺も酒造工で働いて食いつないだ。しかし、近年、酒造も機械化し、酒造工の仲間も減っていった。

いま、67歳。野菜の仲買い収益5万円と国民年金と農業者年金の手取り8万円程度で何とか軽トラックを乗り回して生活してきた。

原発稼働で、放射能を生成して、自然界にまき散らしている。

父が他界して、4か月後の福島原発事故には、俺も母もひっくり返った。母が、「お前が言った事が本当に起きた。」とつぶやき、茫然として目前のテレビにくぎ付けになった。

2011年3月11日の震災は、自然災害だが、原発事故は人災だ。

2年後、母も末期がんで他界した。

父は、病床の時、「俺の人生で心残りは、お前に嫁を世話してやれなかったことと、原発を許した事だ。」と言っていた。

中山さんの名刺

原発が来る前は、貧しいながら助け合って暮らしていたが、原発賛成、反対で、村が二分しておかしくなった。

先日、電力会社の若い職員が、意識調査で訪問してきた。前後して、地元の反対住民の会も反対チラシを配布している。

原発から5km以内の村人は、「あんなもん不要」の意識が大勢だ。若い職員と1時間ほど話し合った。「福島の事故を説明してくれ。俺たちは人体実験を受けているようなものだ。将来に対してリスクを少なくするために、一刻も早く止めてくれ。」

2011年3月11日の原発事故により、我が村の人々の空気は変わった。

隣町の町長が、業者から賄賂を受け取り、町民の同級生ははずかしくて俺とまともに対話しようとしない。

今、唐津の反原発住民の会でともにとりくんでいる。裁判中心の発想であるために、時間はかかるが、反原発活動は、俺のほこりのひとつになっている。

67年生きてきて、この頃、体力がだいぶ弱ってきたと実感していた。

2022年12月2日、プルサーマル裁判の会の皆さんと玄海町役場での話し合いや玄海町ポスティングにも参加した。体がきつくて思うようには配れなかったが、集会まで参加した。

小学、中学の時、先生たちは、「疑問に思ったら、納得するまで勉強せよ。」と言った。

反原発住民の会で手分けして、2022年10月29日に原子力防災訓練を視察した。俺は、地元の京泊の住民避難訓練を視察した。かなり強い風が、対岸の玄海原発の方からふいていた。

なのに、京泊からの避難バスは、風と同じ方向に移動し、有明公民館で避難者は降りた。放射性物質を浴びながらの避難となる。なんのための避難訓練なのかと思った。

政府は、エネルギー問題を原発増設でやりすごそうとしている。何の解決にもならない。人類滅亡の道を速めている。

残された時が少ない俺ができることは、この思いを伝えること。20代、30代、40代の若者は疑問に思わないか？皆で考え、この国の方向を正して行ってほしい。

運動仲間の中山さんは原稿完成直後の1月26日に逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。

玄海町を訪ねて

南アルプス子どもの村中学校3年　鮫島諒

私が通っている、きのくに子どもの村学園　南アルプス子どもの村中学校は、3学年が一緒の縦割りクラスで、プロジェクトとよばれる体験学習を中心にしていて、子どもたちの意思を尊重し活動することや、話し合うことを大切にしている学校です。他の学校と同じように修学旅行がありますが、行き先の検討、ルート決め、予約、会計など、バスの運転と現金の管理以外は、全部子どもたちが行う修学旅行です。

今回、行先が九州地方に決まり、私は真っ先に原発について調べ、みんなに提案しました。一昨年の修学旅行では行先が四国で、伊方原発を止めようと活動している市民団体の方にお話を伺いました。当時の私は、中学1年生ということもあり、あまり原発のことをよく理解せず、お話を聞いても「そうなんだ。」というような感じでした。現在、中学3年生になり、もう一度原発がある地域に住む方たちにお話を聞いてみたいと思ったからです。行き先の候補として、みんなで何度も話し合い、「玄海原発プルサーマルと全基をみんなで止める裁判の会」の石丸さんに連絡させていただき、みなさんにお話を伺うことができました。

玄海町に入って、まず驚いたことは原発が町の中に普通に建設されていたことです。頭では理解していたものの、いままで実物を見たことがなかったため、この時に初めて現実のことだと受け止めた感覚でした。石丸さんは、原発の問題や、玄海町で起きていることをお話してくださいました。また、今も玄海町に住んでいらっしゃる青木さんは、海で奇形魚を多く見ることを教えてくださり、みんな驚きました。自分自身もどこかで「原発や放射線汚染は遠い場所で起きていることだ」と思っていたのかもしれません。しかし、今回現地で実際に住まわれているみなさんのお話を聞くことができ、自分の目で原発を見ることができ、衝撃を受けるだけでなく実感することができました。石丸さんは「今の日本では情報がなく、原発、プルサーマルが良いか悪いか考えることすらできない。しっかりと国、電力会社は危険性も含め広報すべきだ。それに国民もその情報を欲しがらないといけない」とおっしゃっていました。本当にその通りだと思いました。危険かどうかの判断もせず、ただ他人事のように見ているだけではだめだと思い知らされました。

日本政府は国民の目をサッカーに向けさせている間に、原子力政策の方向を大きく転換しました。原発を長く使えるように、そして、新しい原子炉を建てようというのです。必ず出る核のゴミの処分もろくにできないのに、新たに原発を作るなんて馬鹿げていると思いました。原発ほど危険な発電方法はないと3.11で身を持って体験したのに、忘れてしまったのでしょうか。トリチウムは海水で薄めたら海に流してよいのでしょうか。核はまだまだ未知の物です。それを発電に使ってよいのでしょうか。今の大きな発電所で電力を作るシステムは、送電ロスもあり、一部の人が金を儲ける仕組みだと思います。私は、各町で小型水力発電などを活用して発電し、足りない分は地熱や、バイオ、洋上風力、波力など自然の力を利用した発電方法で賄うのがいいと思います。

私は、今回の玄海町への訪問で、日本は大丈夫なのだろうかと不安になってしまいました。敵基地攻撃能力のことや、原発の事にしても、政府がひとりでに進めて、国民も、どうせ止められないとあきらめています。私は怒りをおぼえました。多くの大人たちが怒らずにただ見ている事に対して怒っているのです。まずみんなが、「おかしい」「何か違うんじゃないか」と思う事が大切だと考えます。

今回の修学旅行は、夏から一度延期になりましたが、石丸さんにはよくしていただき、感謝しています。また、こうして、自分の思いを原稿にして投稿させていただいたことにも、大変感謝しています。今回の経験を忘れずに、さまざまな社会問題について今後も考えていきたいです。

※次ページに参加者のみなさんの声

南アルプス子どもの村中学校のみなさんの声（一部抜粋）

●トリチウムは玄海が一番多いなど色んなことが知れて本当によかったです。みんなに知ってほしいので自分に出来ることがあればどんどん行動に移していきたいと思います。（Aさん）

●私は次亜塩素酸でプランクトンや小さい魚を殺している事が印象に残っています。小さな魚は知らず知らず入ってしまったのに、その魚たちを海に戻すのでなく殺してしまうのがとてもかなしかったです。わたしも自然が好きなので原発はもうしないでほしいです。（Rさん）

●しらないことはつみだなと思いました。（Kさん）

●本当に危ないとどんどん分かってきて聞くのがこわくなりました。かんきょうにも悪く、良いことが一つも無いのに政府の人はなぜすすめるのかが気になりました。お話を聞いて「今までなぜ知らなかったんだろう」と思いくやしくなりました。こんな危ない世の中は生きてていやだし、今すぐやめてほしいと思ってます。（Rさん）

●てんけんについてのお話で『10年で25%、1年2.5%しかてんけんができていない』というのにおどろきました。ちょうど原発のてんけん中でしたがちゃんとてんけんできているのかな？と思ってしまいました。今回知ってしまったからにはこれから何か活どうしていけたらいいなとも思いました。（Mさん）

●みなさんがやってきた活動、本当に頭がさがります。これから大人になる私たちのために声をあげて頑張ってくれているのだなと思って今考えるだけでも涙が出てきます。これから自分が大人になってみなさんのようにきれいな心で未来を作っていけるでしょうか。私はとてもふあんです。原発につかわれている「プルトニウム」は長崎の原爆でつかわれた物とおなじなのに、なぜ人はおなじことをくりかえそうとするのでしょうか、私はこれから大人になっても黒いなみにのまれずに生きれるでしょうか。石丸さんのおはなしをきいてから色々なところで立ち止まって考えるようになりました。本当に考えることはたいせつですね。（Kさん）

●最悪の事にならないように活動している会のみなさまがとてもカッコいいと思いました。（Iさん）

●玄海の方がたがこんなにもながい間ずっとたたかいつづけていてすごいなと思いました！お話を聞いた後に原発に行って質問をしてみると「ウランは100%あんぜんです」などかえってきてすごくこわいと思いました。2時間がぎりぎりだったのでまた話をききに行ったり、てつだいをしに行きます！！（Sさん）

●私達中学生に本気になって伝えてくれたことが何よりうれしかったです。心のおくそこまで伝わってきました。原発がどれだけよくない事なのかも分かりました。今回のお話をきっかけに色々なことを考えるようになって、原発さんせいはとはんたいはの意見を聞いて考えました。私は聞いたはなし全てを信じようとは思いません。私自身が何も知らないからです。聞いたおはなしをきっかけに、沢山調べて知って自分の考えを出して伝えるということをしていきたいと思います。（Sさん）

お知らせ

“3.11”から12年

・原発ゼロ！3.11福岡集会・デモ
　3/11(土)14:00～警固公園
　3/13(月)10:00～九電本店申し入れ
・佐賀・玉屋前スタンディング　3/11(土)14～15時
・唐津・市役所前スタンディング 3/11(土)14～15時

第11回 脱原発パネル展

3/23(木)～29(水)

佐賀市立図書館2階ギャラリー

みなさんの支えをお願いします

■年会費　原告会員1万円。支える会会員5000円。
　サポート会員一口1000円～。団体会員も歓迎！
■振込先：郵便振替口座 01790－3－136810
　玄海原発プルサーマル裁判を支える会

知ることから始めませんか？

●座談会しませんか？

原発のこと、命のこと。少人数で本音トークをしませんか。1人からでも、どこへでも行きますので連絡ください！

●チラシ・ポスティングを一緒にしませんか？

控訴審進行中	**玄海全基運転差止裁判** 被告：九州電力⇒不当判決⇒控訴人176人	**玄海許可処分取消行政訴訟** 被告：国　参加人：九電⇒不当判決⇒控訴人187人
裁判終了	**ＭＯＸ燃料使用差止裁判** 原告130人　⇒　不当判決	**３・４号再稼働差止仮処分** 債権者236人　⇒　不当決定